

ピアノ

真嶋 雄大

2024年の鍵盤界でもっともショッキングだったニュースは、マウリツィオ・ポリーニの訃報である。6歳でJ.S.バッハ「平均律クラヴィーア曲集」を、11歳でベートーヴェン「ハンマークラヴィーア」を弾いた大天才は、その玲瓏たる奏法で20～21世紀のピアノ界を牽引、世界のピアノイズムをも変革して君臨、数々の伝説を遺したが、3月24日、ミラノの自宅において82歳で旅立った。

さて鍵盤作品を書いた作曲家の主な2024年のメモリアルを振り返ると、生誕では200年がスメタナ、150年がシェーンベルクとアイヴズ、100年が團伊玖磨、没後では150年がブルグミュラー、100年がフォーレとブゾーニ、50年がミヨーとジョリヴェなどであり、各々に演奏会が開催されCDがリリースされたりもした。

リュカ・ドゥバルグはフォーレ「ピアノ独奏曲全集4CD」をリリース、6月には小菅優がシェーンベルク「月に憑かれたピエロ」をプロデュースして演奏、9月北村朋幹はフォーレ「ピアノ五重奏曲」、94歳の井上二葉は11月にフルートの工藤重典と東京、広島で全曲フォーレで聴衆を沸かせた。

2020年から世界を混乱に陥れた新型コロナウイルス（COVID-19）も5類感染症となって危険性は薄らいだものの終息したわけではない。けれどもそれを受けて演奏会の数は飛躍的に増加し、それまで中止を余儀なくされていた音楽祭も復活の狼煙を上げた。ラ・フォル・ジュルネや宮崎国際音楽祭、ローム ミュージック フェスティバルなどであり、東京・春・音楽祭ではプッフビンダーがベートーヴェンのピアノ・ソナタを全曲演奏、別府アルゲリッチ音楽祭の東京公演ではアルゲリッチとクレームルがヴァインベルクで共演、ARKクラシックスと富士山河口湖ピアノ・フェスティバルでは清水和音と辻井伸行等がその華を競い、北九州国際音楽祭ではキーシンが、ショパン・フェスティバルではエヴァ・ポブウォッカ、岡田博美、實川風らが各々音楽的感興を織り上げた。

11月にはバスカル・ドゥヴァイオン、村田理夏子が音楽監督を務めるNAGAREYAMA国際室内楽音楽祭が創設され、東京文化会館音楽監督の野平一郎による「フェスティヴァル・ランタンポレレ」が開催、現代と古典を組み合わせるコンセプトで、ベートーヴェンとマヌリ、シュベルトとラッヘンマンを採り上げ、阪田知樹、務川慧悟などが参加して盛り上げた。

また外国人ピアニストも来日が大幅に増加し、主だったところだと、1月イーヴォ・ポゴレリチ、エリーザベト王妃国際優勝のジョナタン・フルネル、2月クライバーン国際優勝のイム・ユンチャン、3月エル＝バシヤ、4月ピョートル・アンデルシェフスキ、6月ダン・タイ・ソン、6月チョ・ソンジン、エリソ・ヴィルサラーゼ、7月ステイヴン・ハフ、フランチェスコ・トリスターノ、8月アンティ・シーララ、9月ポール・ルイス、9月マルク＝アンドレ・アムラン、10月ピエール・ロラン＝エマール、11月アレクサンドル・カントロフなどが重厚な演奏を聴かせた。またチョ・ソンジンはラトル指揮バイエルン放送響のソリストとして11月に来日、見事なブラームスで聴衆を魅了した。

近年若手の活躍が目覚ましい日本人ピアニストたちも、幅広い年代で濃厚な演奏活動を繰り広げている。2月には東京芸術劇場リサイタル・シリーズ「VS」で亀井聖矢とクライバーン国際優勝のイム・ユンチャンが共演、反田恭平率いるジャパン・ナショナル管は池辺晋一郎に委嘱した新作「ピアノ協奏曲Ⅳ（草が語ったこと）」を3月に初演、3月には上原彩子がベートーヴェン「ピアノ・ソナタ全曲演奏会」を

スタート、4月掛谷勇三ラフマニノフピアノ独奏作品全曲演奏会の第4回、5月野島稔メモリアル・コンサートが所縁の横須賀で、横山幸雄が弾き振りでベートーヴェン協奏曲ツィクルスを、有森博が「ロシアの玉手箱シリーズVol.14」を、鈴木優人がフランクフルトでチェンバロ・コンサートを、北川暁子がデビュー60周年リサイタルでブラームス等を演奏、6月には近藤嘉宏が配信限定でのアルバムをリリース、82歳の田崎悦子はドビュッシー「前奏曲集」でリサイタルを、また佐々木崇が6年12回をかけたシューマン、主要ピアノ独奏曲、室内楽曲全曲演奏会の最終回で有終の美を飾った。9月には久本祐子がベートーヴェンソナタ全曲シリーズVol.2を、河村尚子がデビュー20周年リサイタルを、また故園田高弘の没後20年を記念し、島田彩乃、松本和将、岡田将、高橋聖、平井千絵、川井綾子、ドゥオールら弟子たちによるコンサートや、園田自身のJ.S.バッハ、ベートーヴェン等のCDボックスセットのリリース、また米寿の館野泉がなんとブータン、ネパールで初のリサイタルを敢行、11月には樋口紀美子が渡欧50周年記念としてオール・ショパンでのリサイタルとCDリリース、福岡洗太郎も日本デビュー20周年でリサイタルとCDをリリースした。

また若手ピアノ・トリオの活動も輝かしい。第67回ミュンヘン国際音楽コンクールのピアノ三重奏部門で日本人団体として初の優勝を受賞した葵トリオを始めとして、石田泰尚、西谷牧人、佐藤卓史によるTrio Japan、ベルリンで出会った金川真弓、佐藤晴真、久末航トリオ、そして谷川かつら、瀬川祥子、水谷川優子によるTRIO Sol Laらはそれぞれに顕著で積極的な演奏活動を展開していて存在感を増している。

古楽系では、4月ブルージュ国際古楽コンクール優勝者マチエイ・スクシェチュコフスキが全国ツアー、小倉貴久子が川口成彦と2台協奏曲で師弟共演、3月にはショパン国際ピリオド楽器コンクール優勝のトマシュ・リッテルと第2位川口成彦、ショパンコンクール覇者のアヴデーエワがショパンのピアノとオケのための全6作品を18世紀オケと共演。

さて2024年に開催されたコンクールを振り返ると、リーズ国際ピアノコンクールではカナダのジェイデン・アイジク＝ズルコが優勝、日本勢はファイナルには進めなかったが牛田智大が健闘、11月には第12回浜松国際ピアノコンクールが開催され、鈴木愛美が日本人初、女性としても初の優勝を飾り、小林海都も第3位に入賞。ブルージュ国際古楽コンクールでは、前述のトマシュ・リッテルが栄冠を獲得、ピリオド楽器界に大きな存在感を示した。

日本の賞関係だと第33回出光音楽賞に務川慧悟、第50回日本ショパン協会賞に亀井聖矢、ショパン協会会長の海老彰子が令和6年度文化庁長官表彰を受けた。

さて2024年もピアニストの訃報が相次いだ。冒頭のポリーニをはじめ、江戸京子が1月23日86歳で、ショパン弾きとして著名なユージン・インジックが2月28日76歳で、バイロン・ジャニスが3月14日に95歳で、フジコ・ヘミングが4月21日に92歳で、まだ若い佐藤祐介が4月19日に35歳で、ヤヌシュ・オレイニチャクが10月20日に72歳で、そしてアルトゥール・モレイラ・リマが10月30日で84歳で他界、それぞれに功績があったピアニストだけに冥福を祈る。

2025年の鍵盤界がなお一層飛躍することを切に願う。

真嶋雄大（まじま・ゆうだい）

音楽評論家、作曲家。朝日新聞、「音楽の友」等媒体を始め、演奏会やCDの曲目解説、音楽劇の台本等の執筆、NHK-FM等への出演を続け、全国でレクチャー・コンサートやプロデュースを展開、とりわけ甲府での「特別コンサート」、岡谷での「クラシック探訪」、ベゼンドルファー「美女と野獣」等は大好評、その模様が「日経ビジュアル音楽堂」で紹介された。著書に「ピアニストの系譜」、「グールドと32人のピアニスト」等。YCC文化ホール等アドバイザー、「真嶋雄大の面白クラシック」主宰。